



# ftServer におけるログ取得手順 (Linux 編)

Rev 0.4: 2016/04/12

## はじめに

このドキュメントではftServerに関する障害調査を行う際に、必要となるログ・データの取得方法を説明しています。ログ・データの取得には、初期解析用のデータの取得方法と、詳細な調査を行うときのデータ取得方法があります。特別な理由でOS側のログが必要となった場合には「RHELログの取得について」をご参照下さい。尚、状況に応じてこれらのログの取得の他に追加のログや情報の取得を別途依頼させていただく場合がございます。

## ■ 初期解析用データ取得方法について

ftServerハードウェア障害の初期調査段階に必要なデータやログファイルを収集し、1つのアーカイブファイルにまとめるという方法です。一般的なハードウェア故障の判断などに有効です。

次の方法でログを取得します。

尚、この作業を実施する際にはrootアカウントでログインして下さい。

(通常の設定では、一般ユーザアカウントにはログファイルへのアクセス権がありません)

① 次のコマンドで作成される/tmp/sralog.tgz を取得します。

```
# cd /
# rpm -qa > /tmp/rpm-qa.txt
# /opt/ft/bin/ftsmaint ls > /tmp/ftsmaint.txt
# /opt/ft/bin/ftsmaint lslong > /tmp/ftsmaintlong.txt
# cat /proc/mdstat > /tmp/mdstat.txt
# mdadm -D /dev/md* > /tmp/mdadm.txt
# tar czf /tmp/sralog.tgz ./var/log/messages* ./var/opt/ft/log/ring_buffer*
./var/opt/ft/log/osm.log* ./tmp/rpm-qa.txt ./tmp/ftsmaint.txt ./tmp/ftsmaintlong.txt
./tmp/mdstat.txt ./tmp/mdadm.txt
```

注意: 上記のtarコマンドの記述はファイル名が分かりやすいように改行を入れて記載していますが、実際に取得する際には、ファイル名の後はスペースを入れて改行せずに続けて入力してください。

② ログの取得が終わったら、1.で/tmpディレクトリ上に作成したファイル削除します。

```
# rm -f /tmp/sralog.tgz /tmp/rpm-qa.txt /tmp/ftsmaint.txt /tmp/ftsmaintlong.txt
/tmp/mdstat.txt /tmp/mdadm.txt
```

## ■ 詳細データ取得方法について

Stratusサポートセンターより、必要に応じて詳細データの取得を依頼することがあります。詳細データはbuggrabber.plツールがログファイルを一箇所に集めて1つのファイルに圧縮したファイルを生成します。収集するログファイルの量によりますが、ファイルサイズは100MBから数ギガバイトになることがあります。

注意: 2008年に販売された第4世代 ftServer 25x0/44x0/62x0および、それ以前の機器の場合には、後述の『ftLinux 6.0 以前』の詳細データ取得方法をご参照下さい。使用されている機器が不明な場合には型番をご確認下さい。型番は本体シェルフ背面に貼付されているラベルに記載されています。また以下のコマンドでも確認することができます。

```
# /opt/ft/bin/ftsmaint ls
```

次の方法でログを取得します。

尚、この作業を実施する際にはrootアカウントでログインして下さい。

(通常の設定では、一般ユーザアカウントにはログファイルへのアクセス権がありません)

① 次のスクリプトでログを採取します。

```
# /opt/ft/sbin/buggrabber.pl
```

buggrabber.plを実行するとディレクトリ/home/BugPool/Bug\_YYYYMMDD.tar(たとえばBug\_20100531.tar)にログファイルがまとめられます。このファイルを取得します。

② ログの取得後、作成したファイルを削除します。

```
# rm -rf /home/BugPool/Bug_YYYYMMDD.tar
```

ftLinux 6.0 以前

注意: この方法は2008年に販売された第4世代 ftServer 25x0/44x0/62x0および、それ以前の機器が対象です。それ以外の機器の場合には上述の方法でログを取得して下さい。

次の方法でログを取得します。

尚、この作業を実施する際にはrootアカウントでログインして下さい。

(通常の設定では、一般ユーザアカウントにはログファイルへのアクセス権がありません)

① 次のスクリプトでログを採取します。

```
# /opt/ft/sbin/buggrabber.pl
```

ディレクトリ/home/BugPool/Bug\_YYYYMMDD(たとえばBug\_20100531)にログファイルが集められます。

- ② 次のコマンドでログファイルをまとめます。(Bug\_YYYYMMDD の部分は今作成されたディレクトリ名を入れてください。)ここで作成された/home/BugPool/Bug\_YYYYMMDD.tgz を取得します。

```
# cd /home/BugPool
# tar czf ./Bug_YYYYMMDD.tgz ./Bug_YYYYMMDD
```

- ③ ログの取得後、作成したファイルを削除します。

```
# rm -rf ./Bug_YYYYMMDD ./Bug_YYYYMMDD.tgz
```

## ■RHELログの取得について

Red Hat Enterprise Linuxオペレーティング・システムの調査を行う場合には、次のコマンドでログを取得します。RHELログの取得はストラタスのサポートセンターより依頼があった場合に実施して下さい。尚、RHEL5.xおよびそれ以前のOSをご利用の場合には後述の注意事項を必ずご参照下さい。

```
# sosreport
```

(実行例)

```
# sosreport
```

```
sosreport (version 3.2)
```

This command will collect diagnostic and configuration information from this Red Hat Enterprise Linux system and installed applications.

An archive containing the collected information will be generated in /var/tmp and may be provided to a Red Hat support representative.

Any information provided to Red Hat will be treated in accordance with the published support policies at:

<https://access.redhat.com/support/>

The generated archive may contain data considered sensitive and its content should be reviewed by the originating organization before being passed to any third party.

No changes will be made to system configuration.

Press ENTER to continue, or CTRL-C to quit.

← Enter を入力します

Please enter your first initial and last name [localhost.localdomain]:

← Enter を入力します

Please enter the case id that you are generating this report for:

1234← 適当な数字を入力します

Setting up archive ...

Setting up plugins ...

Running plugins. Please wait ...

...

Your sosreport has been generated and saved in:

/var/tmp/sosreport-localhost.localdomain.1234-20160304104725.tar.xz

The checksum is: 929aac341d2ae3f0d14ba54c48104cf5

Please send this file to your support representative.

-----  
ログファイルは/tmp/sosreport-[ホスト名].xxxxx.tar.bz2 という形式の名前で作成されます。このファイルを取得します。

注意: RHEL 5.X(およびRHEL4.X)で動作しているftServerシステムでこのコマンドを実行すると、ftServerのCPUエンクロージャの片系が一旦切り離され、その後自動的に二重化に復旧する動作が発生しますが、sosreportコマンドスクリプトに次の修正(コメントアウト編集)を行うことでこの動作の発生を回避することができます。

修正するファイル: /usr/sbin/sysreport

修正内容: 以下の行を編集

289c289

< catiffile "/proc/bus"

----

```
> #catiffile "/proc/bus"
```